

大久野島毒ガス博物館

大久野島毒ガス博物館は、1929年に島に建設され、1945年の第二次世界大戦が終わるまで使用されていた化学兵器工場を人々に知ってもらう為に、1988年に設立されました。

この小さな博物館の最初の部屋は、大久野島で化学兵器を開発するための大日本帝国陸軍の秘密のプログラムに焦点を当てています。マスタードガスと催涙ガスは島の工場で生産されました。また、大久野島で製造された気球爆弾（ふ号）と呼ばれる焼夷弾に関する展示があります。ふ号は、太平洋上のジェット気流を使ってアメリカの都市に爆弾を投下できる安価な武器として設計されたものです。展示品は、化学兵器工場の危険な労働条件と、人体への毒ガスの影響を強調しています。作業員が着用していたゴム製のスーツ、防毒マスク、手袋、ブーツは完全に気密ではなく、有毒物質が浸透し、皮膚、目、喉に損傷を与えました。労働者の多くは化学物質の影響に苦しんでいました。展示には、毒ガスの製造と保管に使用される機械のほか、ノートやトレーニングマニュアルなどの労働者の文書も含まれています。

2番目の部屋では、毒ガスが人体、特に肺、目、皮膚、心臓にどのように影響するかを示すポスターや写真が教育的に展示されています。イラクやイランの毒ガス犠牲者の写真は、最近の化学戦争の恐ろしさを示しています。

島には、南、中央、北の砲台遺跡や閉鎖された工場など、戦争関連の遺跡が点在しています。日露戦争（1904-1905）の前に、島は瀬戸内海を保護するために強化されました。敵を監視するために3つの砲台が建設されました。

北砲台遺跡は、島で建設された元砲台の1つの遺跡です。1897年から1902年の間に22の大砲が設置されました。第二次世界大戦中には、北砲台遺跡は毒ガスの貯蔵に使用されました。

弾薬保管倉庫は、第二次世界大戦中は毒ガスを保管し、朝鮮戦争（1950～1953年）には米軍の弾薬を保管するためにも使用されました。建物の屋根は、爆発時の損傷を抑えるために軽い素材で作られていました。

現在廃墟となっている発電所は、第二次世界大戦中に島に電力を供給し、朝鮮戦争中に弾薬を保管するために使用されました。その歴史のしるしは、壁の「MAG2」というサインに今でもはっきりと表れており、弾薬を保管する場所であったことを示しています。

長浦毒ガス倉庫は島で最大の毒ガス倉庫でした。6つの部屋のそれぞれに約100トンの毒ガスが貯蔵されていました。もともとはカモフラージュカラーで塗装されていました。

大久野島毒ガス博物館は、被災者・関係町町村、広島県を代表する団体の協力を得て建設されました。博物館と大久野島の人々は、観光客が広島市の広島平和記念資料館と一緒に博物館を訪れ、平和の重要性について学ぶことを望んでいます。